

Gilles KEPEL (tr. Susan Milner), *Allah in the West*
Stanford University, 1997, 273pp.

(原著 *A l'Ouest d'Allah*, Seuil, 1994)

立田由紀恵

著者ジル・ケペルは1991年の著作『宗教の復讐』で、1970年代以降の世界各地にわたるイスラーム、キリスト教、ユダヤ教運動を概観した。翌年には邦訳もされたこの本は、世界各地の宗教運動を体系的にまとめたもので、日本でも非常に高い関心を生んだが、元来彼が政治社会学者として取り組んできたのは現代イスラーム運動であり、今回の著作はその原点に再び回帰し、さらに対象地域を広げたものと見るができる。これまでに研究してきたイギリス、フランスのイスラームに加え、アメリカの「ブラック・ムスリム」運動も並べられているのだが、この野心的な試みは、同時に大きな問題点も生じることとなってしまったように思われる。

英仏の場合のイスラームは移民の宗教であるのに対し、「ブラック・ムスリム」の掲げるイスラームは新たにアメリカでつくりあげられたもので、イスラーム伝統から受け継いだものはあまり見受けられず、これをイスラームと呼ぶかどうかとも疑問に感じられる程である。また、英仏の場合は国内のムスリム全体について論じられているが、一方「ブラック・ムスリム」運動の活動団体であるネイション・オブ・イスラームは、メンバー数が最大でも数万人でしかなかった。比較対象としてはむしろ、アメリカ黒人の間に200万人以上の信者を持つスンナ派イスラームのほうが妥当だとも考えられる。

しかし、ネイション・オブ・イスラームはイスラーム運動として先駆的であったのみならず、社会運動という面でもアメリカ国内で群を抜いて顕著である。そのため、政治社会学者である著者によるこの分析は、アメリカの事例の特殊性を念頭においた上でならば、画期的かつ有効なものであろう。

本書で取り上げられているアメリカ、イギリス、フランスの三国は、いずれも欧米世界の中で特に象徴的なイスラームの事件を経験している。イギリスはサルマン・ラシュディの『悪魔の詩』事件、フランスは女子学生のヴェール事件、そしてアメリカはブラック・ムスリム運動そのものが事件として考えられた。ブラック・ムスリム、つまりネイション・オブ・イスラームの運動を英仏の移民イスラーム問題と並べて論じることにはいささかとまどいを感じるが、いずれもその背景にはマイノリティと市民権という共通した問題を持っており、アイデンティティの危機という共通の課題のもとに、共同体主義という共通の方向性を示している。また、そこでいずれの場合も重要な論点となるのが、第二世代以降のホスト社会生まれのムスリム教育のことである。

著者の意図はこの3国のイスラーム運動をそれぞれに描写することであるようだが、そこでア

アイデンティティと共同体主義という2つの概念がその3通りのイスラームを貫いている。以下、本書の章立てに従って、それぞれのイスラーム運動を概観する。

1. アメリカ

アメリカのイスラームについてのケペルの記述は、その社会的背景である黒人問題を中心として描かれている。黒人が自らの生きる道を模索する際に、どのようにしてイスラームが浮上してきたのか、ということである。

黒人解放運動として有名なのは、キング牧師に代表される公民権運動である。非暴力主義をその戦略として広く南部において展開し、白人との平等な権利を求めた公民権運動は、白人からも非常に高く評価されている。しかしその運動の真っ最中である50年代、60年代にあって、特に北部大都市の黒人たちはそれを非常に冷めた目で見ている。都市部黒人の支持を集めたのは、むしろマルコムXで有名になったネイション・オブ・イスラームだった。これこそが、一般に「ブラック・ムスリム」の名で知られるアメリカのイスラーム運動の母体である。

彼らはイスラームを標榜してはいても、実際のイスラーム伝統を引き継いでいるわけではなかった。現在ではかなりスナ派のイスラームへの歩み寄りが見られるため、これをアメリカ独自に生じたイスラームであるとするケペルの捉え方も妥当となりつつあるだろうが、少なくとも創立当時のイスラームとは名ばかりのものであり、その教義は創設者であるファード・ムハンマドと、二代目の指導者であるイライジャ・ムハンマドによって創りだされたのだった。

教義の中心となっているのは、「白人は悪魔」というものである。当事者でない我々にはあまりにも現実からかけ離れた教えに思われるが、これこそがネイション・オブ・イスラームの台頭の主要因となったのである。

アメリカ社会の中で黒人たちに付与されたアイデンティティは、奴隷を先祖に持つ劣った種族だという、甚だ屈辱的なものだった。ケペルは、これに代わる新たなアイデンティティの形成こそが、アメリカにおいてイスラームが果たしてきた役割だったのだと指摘する。そしてあまりに長い間黒人たちの自己肯定感を奪い続け、彼らを社会の周縁へと追いやってきたこの黒人自己意識を打破するためには、単に黒人を白人と平等な人間だとする自己認識では不十分だった。彼らが自己の尊厳を取り戻すためには、自分たちの苦しみの原因であるホスト社会の白人を悪魔と規定し、自らを神に選ばれた民であるとするまでの過激なアイデンティティ形成が必要だったのだ。そして実際この教えは彼らにとって非常にリアリティのあるものとして受け入れられていった。ある程度彼らに黒人としての尊厳が定着してきた現在では、「白人は悪魔」の主張はそれほど中心的で重大なテーマではなくなってきている。現在の指導者ルイス・ファラカンは、社会的状況と教団の成熟を背景として、また新しい方向にブラック・ムスリム達を導こうとしているのだと述べられている。

ケペルの分析によれば、英仏と比べた場合にネイション・オブ・イスラームに特徴的なのは、イスラームを中心とする共同体がホスト社会との関係において過激な分離主義を掲げたことである。そしてその発想の原型として、本書ではブラック・ナショナリズム運動にも言及されている。

20世紀初頭にマーカス・ガーヴェイによって広められたブラック・ナショナリズム運動は、「ア

フリカに帰れ」というスローガンを持ち、白人社会からの分離とアフリカへの移住を主張した。一方ネイション・オブ・イスラームの分離主義は現在のアフリカを目的地とはせず、あくまで自分たちの生まれ育ったアメリカの内部における独立を訴えてきた。彼らの共同体主義はこのように、独立という非常に極端な目標を持つものであったが、それでもアメリカの内部にとどまろうとするところが、後に述べられるイギリス、フランスのムスリムの共同体主義と対比されている。

アメリカ黒人のヒーローとして映画化までされたマルコムXは、「ブラック・ムスリム」運動の転換において非常に重要な役割を果たした。彼にはケベルも注目しており、第1章の第2節は彼に関する記述にあてられている。イライジャ・ムハンマドの右腕として教団の拡大におそるべき力を発揮したマルコムXは、最後には教団を離れてスンナ派のムスリムとなった。このマルコムの改宗は、その後の黒人ムスリム社会をスンナ派の方向へと向けていく決定的な契機となる事件だった。75年にイライジャ・ムハンマドが死去すると、その息子のウォレス・ディーンはネイション・オブ・イスラームの教義を全くスンナ派のものに変えてしまった。大半の信者はこれに従ったが、彼の改革を受け入れられなかった人々はルイス・ファラカンの指導の元に新しくネイション・オブ・イスラームを再建した。ケベルの記述から明らかであるが、一時期の中断はあるものの、現在のネイションは創設当時からの連続性を保っているといえる。

ケベルは、今後のネイションの動向にも大きな関心をはらっている。ファラカンはネイションの旧来の教えを守りながら、団体の方向性を少しずつ変えていっている。過激な教えで信者を引きつける時期を過ぎ、今度はイスラーム世界及びホスト社会たるアメリカ自体からの承認を得るため、過激な言説は控えめになり、社会更正運動の面を強調したり、またスンナ派イスラームの教義への歩み寄りを見せたりもしてきている。信者数こそ数千人程度と少ないものの、着実に黒人社会内での支持を得ているネイションは、新たなるイスラーム共同体の確立へ向け、さらなる脱皮をはかろうとしている、とケベルは指摘している。

2. イギリス

イギリスのムスリムの多くは、インド亜大陸（主にパキスタン）からの移民である。他言語、他文化的社会という条件のために、インドでは一つの統一されたイスラームが形成されることはできなかったが、その影響は今日のイギリスにおけるイスラーム統一の問題にも見受けられる。これが、ケベルによるイギリスのイスラーム把握の基礎となっている。以下、ケベルによるイギリスのイスラーム問題の分析を概観する。

英国統治下の19世紀に、ムスリム皇帝の廃位というイスラームの尊厳にかかわる大事件がおきると、インドのムスリム達はヒンドゥー、イギリスから見た二重のマイノリティ性を背負わねばならなくなった。そこでイスラームが求めた打開への道は、宗教的と政治的の二通りがある。宗教的には、イスラームを内的に確立しようとする「内的ヒジュラ」の方向があり、政治的には物理的独立という実際的な目標が掲げられ、パキスタンの独立へとつながっていった。内面へと向かった例としては、厳格なスンナ派であるデオバンディ運動や、スーフイズムの流れをくむパレルヴィ運動がある。彼らはホスト社会には従順に従い、その内面のイスラーム性を追求することに自らのアイデンティティを求めようとしていた。一方、それらの内的運動を本来のイスラーム

の共同体志向的教義に反するとして排斥し、イスラームの行われぬ国家に住むことを拒み、独立を主張していったグループとしては、まずタブリーグ運動が現れたが、その急進的な形態であるジャマーアテ・イスラミーは、世界的イスラーム主義組織の一つにまで発展した。それらの諸運動はイギリスへの移民後も統合されることはなく、それぞれに統括的地位をめぐる鎬を削ることになった。『悪魔の詩』問題は、その競争を噴出させる格好の契機ともなったのだった。

イギリスという国は元来複数の国家が連合して成立しているため、複合的な国民アイデンティティの伝統が存在していた。すなわち、イギリス王国の国民であると同時にスコットランド人でもある、といったことである。その概念は英連邦の各植民地や、後にはそこからの移民にも適用された。イギリスにおける移民は、法的には完全な市民権を当初から付与されていたのだった。

しかし一方、イギリスには国家宗教としての英国教会キリスト教がある。これは非宗教性の原則を持つフランスと大きく異なる点として、ケペルが指摘している部分である。つまり、文化的なイギリス市民とは英国教会への所属を前提とするものであり、法的には完全な市民権を持つムスリム移民も、その部分で制約を受けざるを得ない状況になってしまうのだ。

初期のムスリム移民は単純労働者として単身渡英し、いずれはインドへと帰ることが前提となっていた。イギリスは一時的に労働するために居住しているだけの土地であり、彼らはインド人としてのアイデンティティを当然のように持ち続けることができたのだった。しかし、移民の定住化、永住化が進み、イギリス生まれの二世世代ムスリムの問題も生じてくると、彼らは完全な文化的市民権を得ることが不可能なイギリスにおいて、新たなアイデンティティを必要とするようになった。そこで選ばれていったのが、ムスリム・アイデンティティである。定住化の進んだ工業都市ではモスクの数も増え、礼拝への参加者も増加していった。(これが、ヨーロッパ人の恐怖心を誘ったイスラームの可視化現象である。)

英国教会との関連で、彼らが宗教的不自由を最も感じる点となる場所は、フランスと同じく学校教育の場だった。イギリスの学校では国教会キリスト教の教育が基本となっており、それに加えてカトリックやユダヤ教も教えるという形になっていた。イスラームの教育を受けるにはモスクの学校に通わせるしかなかった彼らは、公教育の場でもイスラームを教えるよう主張していった。単に国内での存在を認められるだけではなく、国家を形成する一共同体としての立場を確立しようとしたのだったが、それはそれまでイギリスが提供してきた多文化的状況では不十分なのだった。そこでイギリスは市民権の在り方を新たに問い直されることになっている。

彼らの共同体主義は、二つの方向に分裂している。指導者側は他共同体との平和共存の概念としてこれを位置づけようとするが、実際に活発な活動を展開している草の根レベルでは、共同体主義は反権力の言説として用いられている。

ムスリムとして自らを規定することを選んだ彼らは、ムスリムとしての一つの共同体を確立し、ホスト社会からも認められることを求めていったが、先述したような理由でそれはなかなかうまく進まなかった。そしてそんな時に起きたのが『悪魔の詩』事件だったのだ。

この事件は国内での覇権争いと結びつき、ブラッドフォードのモスクによる焚書騒ぎにまで発展したが、最後にはホメイニの死刑宣告に回収されていってしまう。そして諸イスラーム団体の努力も虚しく、いずれも英国ムスリム社会内で中心的な位置を占めるにはいまだ至っていないということだ。

3. フランス

フランスの場合は、イギリスとはちょうど正反対で、ライシテの原則のもとに政教分離が徹底されている。公の場での一切の宗教活動を禁じるこのライシテの原則は、生活領域と不可分の宗教であるイスラームにとっては、その信仰そのものをも妨げるものとなってしまった。

フランスにおいても、ムスリムの大半は移民であるが、彼らの最大の出身国はアルジェリアである。イギリスのムスリムはインドのイスラームとは全く独立した活動を行っていたが、フランスのイスラームはアルジェリアのイスラーム組織と密接に関連している。

英米で見られたアイデンティティ問題は、フランスに彼らが移民してくる前、つまりアルジェリアで既に論じられていた。アルジェリアにおいては、もともとベルベル語文化と、アラブの一国国家としてのアラビア語文化、そしてフランス文化が混在していた。そのいずれを自らのアイデンティティとして選び取るかという問題は、彼らがフランスに移民すると一層深刻になった。そして、プールと呼ばれる第二世代の若者達は、フランスに生まれ育ちながらフランス市民として認められないというアイデンティティ危機の解決として、イスラームに回帰していった。しかしそれはフランス社会において拒否反応を引き起こす結果となる。その一つの顕著な現れが、女子学生のヴェール問題だったのである。

学校でムスリム女子学生がヴェールを被ることは、フランスで禁じられている公共の場での宗教活動にあたるとして、ある日からその女子学生は教室に入ることを拒否された。しかしムスリム女性にとってヴェールを被ることは日常生活の上で守らなければならない義務であり、それが侵害されることは人権の問題だとして、再イスラーム化した若者達の運動の格好の焦点となったのだった。

ここで注目されるのは、双方にとって、必ずしもヴェールそのものが問題なのではなかったということだ。その女子学生はそれまでも学校へヴェールを被って通っていたが、学校側からは注意が呼びかけられただけで済んでいた。一方、ムスリムが大半を占める世俗国家トルコでは、学校でのヴェール着用は禁止されている。むしろヴェール問題を契機としてそれぞれの運動を展開させることの方に意味があったのである。

アメリカ黒人の場合と同様、フランスで底辺の生活を割り当てられてきたアルジェリア系の移民にとって、イスラームは彼らの状況を説明する世界観を提供するものだったようだ。すなわち、彼らの苦しみは、フランスという異教の地、神の前で清浄ならざる地にあるために受けねばならなくなる苦しみであるというものだ。そこでいかにして清浄さを回復するかは、インドの内的ヒジュラと似ている。イスラームの地へ帰るのではなく、政治的独立を目指すのではなく、ただ現在彼らのいるフランスの地で清浄なる共同体内に清浄なるムスリム生活を送るべきだとするのである。イスラームは彼ら、特に第二世代の若者達にとって、個人のアイデンティティを確立させるはたらきをしているのみならず、日常生活の指針を与え、所属すべき社会組織を提供する、まさに生活の基礎を築くものとなっている。この点で、アメリカの黒人イスラームはこれと全く同様の機能を果たしていると見ることができ、ケペルによるこれら三国におけるイスラームの比較の意味が明確に見られるであろう。

ケペルが焦点として用いた「共同体主義」は、米英仏の三国について次のようにまとめられている。

移民の国アメリカは、国家成立時から国家内の諸共同体の併存が前提となっており、そこで共同体主義は分離主義という極端な形で表れることとなった。一方イギリスでは、共同体主義が元来国家の基本構造を形成しており、差別是正の機能も制度的に備えられていたため、むしろイスラームは平和共存、統合の理念的な中核となっていた。しかし構造的差別が顕著になるにつれて次第に、ホスト社会と対抗する手段として、差異を強調する方向へと変質していった。そしてそもそも共同体主義的伝統に欠けていたフランスでは、「労働者階級」に代わって社会から構造的に疎外された人々を吸収するアイデンティティとして「イスラーム」があらわれたのだ。

フランス人であるケペルは、従来自国フランスのイスラームを主に研究してきた。「共同体主義」を分析の中心に据えているのはそのフランス・イスラーム研究からの発想であろうと考えられる。そのため、特にアメリカについては冒頭に述べた理由からも、その観点から英仏と並べて分析することの妥当性には疑問もあるが、対照的な社会的背景を持つフランスとの比較等、今後重要な視点がここで開かれている。

ケペルはこれら3国におけるイスラーム運動をその背景から個別に描写しながら、それらに共通するモチーフを浮き上がらせている。『宗教の復讐』ではそのモチーフは「下からのイスラーム化」として描かれていたが、本書では「共同体主義」を据えることによって、政治社会学的観点からの分析をよりいっそう深めている。そしてそれは単にイスラームという従来西欧社会とは馴染みのあまりなかった文化の拡大を説明づけるのみならず、さらに西欧文化自身を省み捉え直すことを求めるような形で提示されている。

ケペルは西側社会における現代イスラーム研究において主導的な役割をはたす研究者である。その彼は本書において、直接には言及していないものの、もうひとつの投げかけを行ったように思える。それは、西欧の知的枠組みそのものへの疑問である。共同体主義を中心としたこれらの社会運動の分析は、本文中にも明記されているとおり、その前提である西欧的市民権の概念にまで見直しを迫るものとなる。西欧の文脈では把握しきれないために、西欧社会において危険視され周縁へと排斥されていたイスラームが、まさにその西欧社会の内部においてその存在を主張するとき、それはホスト社会自身の在り方、自己認識への問いかけを必然的に含むものだったのだと考えることもできるだろう。合理主義的精神を武器にして全世界を理解しようと試み、その前提としての自らの優越性を前提として疑わない西側知識人に対して、ケペルはその限界を示しているようだ。

今まで個別で得体の知れない事象として捉えられがちであった現代宗教、特にイスラームの動向は、彼によって大きな流れの中に位置づけ提示された。それは今までの西欧的価値観の転倒をも含んだものであり、これが真に我々にインパクトを持って立ち現れるのはまだまだこれからのことなのかもしれない。彼によって開かれた西欧文明への視点、そしてイスラームへの関心は今後の更なる検証を待っている。我々後進の研究者、ことに宗教学研究が引き継ぐべき課題は大きい。